東京都リハビリテーション病院
医療ソーシャルワーカー
白野　光（しろの　ひかる）　さん

東海大学卒業
医療ソーシャルワーカー歴８年（2024 年現在）
東京都出身

１．医療ソーシャルワーカーを目指した“きっかけ”は何ですか

祖父母と長く生活をしていたので、中学生頃から漠然と、将来は介護の仕事を考えていました。
（祖父を自宅で看取った経験もあり）
大学では介護のことなどを学びたいと思い、介護福祉士の資格取得が可能な大学を探して東海大学に進みました。進学後、介護福祉の他、社会福祉についても学んでいました。
そんな中、実習で大学病院に行くことがあり、そこでのスーパーバイザーの臨床が、実際に大学で学んだ「人を理解させてもらう実践であり学問であること」を現場で実践をしていて、よりソーシャルワークのことを知りたい、医療の現場でソーシャルワーク実践をしたいと強く思いました。

２．医療ソーシャルワーカーの仕事をしてみていかがですか

人の人生に触れさせていただくことは、とても重みがあり、責任があることで、研鑽を続けることが大切だと日々感じています。
患者様にとって、医療機関は日常と離れた場所だと思うので、医療ソーシャルワーカーの権利擁護の視点は大切だと思っています。

３．医療ソーシャルワーカーの仕事をしてみて“やりがい”は何ですか

今は回復期リハビリテーション病棟を担当しています。退院支援や両立支援など、生活をイメージした関りができることにやりがいを感じています。例えば、高次脳機能障害の方で生活に戻れても、就労はできるのか、実際に地域障害者職業センターと連携をして、職場の方と話し合いを行うなど、その方に何が必要かなど、患者様主体の支援を行いながら、サポート体制を構築できるところにやりがいを感じています。
面接をするときは相手の世界に入るので、敬意をもって接しています。どのように生きてきたのか、これからどのように生きていくのかをお話させていただくので、援助者としての態度、姿勢は大切にしています。クライエントへのリスペクトは大切にしたいと思っています。

４．今後について

大学院への進学を考えています。
大学時代に実習でお世話になったスーパーバイザーがロールモデルとなっています。
実際に医療機関で臨床を行うことも大切ですが、臨床で経験したことをまとめたり、後進へ伝えたりすることも大切であることと、学問としてソーシャルワークを深めたいと思っています。現在は、アルコール依存症や、脳卒中の治療と仕事の両立支援に関する研究を考えています。

５．学生に向けてのメッセージ

私が医療ソーシャルワーカーになったときは、すでに診療報酬制度の中に、社会福祉士（医療ソーシャルワーカー）が位置付けられている状況で、退院支援が組織に求められていました。退院支援＝ベッドコントロールではなく、そこには患者様の生の生活があります。患者様との面接を通して、アセスメントを共有し、ソーシャルワーク支援をすることが、結果的には適切な期間でのベッドコントロールに繋がることを現場で感じています。

医療ソーシャルワーカーとして、人を理解すること、クライエントの権利を守ることは、実際に臨床で説明がつくことを伝えていきたいです。

日本医療ソーシャルワーカー協会、東京都医療ソーシャルワーカー協会に所属しています。現場で活きる研修を企画してくださるので、多くの研修を受けて研鑽をしています。今後は研修受講後に継続的にフォロー体制がより充実すると良いと思っています。